

ヴィクトリア朝英国における世界観

——万博と「文化帝国主義」——

東 田 雅 博

序

一九世紀のイギリスの文化・思想状況についてしばしば楽観的な進歩思想が支配的であったと説かれる。当該期を対象とする概説書において、「ヴィクトリア朝人士に特徴的な『進歩』をもって歴史の法則と見るあの楽天的な信念」⁽¹⁾等々の指摘に出会うことが少なくないのである。ところが、この「楽天的な信念」について十分な分析がなされているとは言えないのである。そもそも一つの時代の精神を分析することなど不可能な試みであるというのが一般的通念のようであり、そのため十分な分析がないのかもしれない。しかし、本稿の試みは一つの時代の特定の思想傾向を一定の視角から分析せんとするものであって、あながち不可能とは言えないと思われるのである。それはともかく、「楽天的信念」に関してこれまでになされた分析を見ておこう。ヴィクトリア時代に關して今述べた一般的通念に反した研究が筆者の知る限りでた

だ一つ存在する。W・E・ホートンの『ヴィクトリア時代の精神的枠組、一八三〇—一八七〇』である⁽²⁾。そして、本書は、「楽天的信念」について本格的に分析した唯一の研究でもあるのである⁽³⁾。そこで以下においてホートンの所説を簡単に紹介しておこう。彼によれば、一八三〇年代は「進歩」への信頼が回復、増大したという意味で転換期であった。それにはカーライル、J・S・ミル、T・B・マコーレー等の努力に負う所も少なくなかった。そして、一世代後には、「進歩」への信頼は、「科学的基礎に基づく社会の再建」が当該期の仮説となるほどの科学への信仰の故にますます増大したのである。かかる「進歩」への確信は、自然を征服する人間の力に対する賞賛、更には地球を支配するイギリス人の力への賞賛としても表明された⁽⁴⁾。

ホートンの研究は、類書がないという事情の下では一応満足ゆくものと言わねばならない。にもかかわらず、筆者にとってそれが不十分に思えるのは、次のような筆者の問題関心のせいである。筆者は、かつてP・J・ケイン、R・グラ

ハムズの「文化帝国主義 Cultural Imperialism」⁽⁵⁾という概念に触発されて筆者なりに試論を展開したことがある。彼らの言う「文化帝国主義」とは、「膨脹する国家の文化的諸特徴が相手国の文化の中に浸透し、代置してしまう程度」⁽⁶⁾をメルクマールとする帝国主義なのだが、筆者はかかる後進世界での文化的従属状況の生じる基本的要因が先進国の後進世界への経済的進出の増大にあることを認めつつも、更に、先進国の側からの後進世界への「文明化」の使命の遂行と、後進世界の側からの先進国をモデルとする近代化の遂行とをそととした現象の起因として認めるべきことを主張した⁽⁷⁾。このように「文化帝国主義」の概念は帝国主義支配の研究に新たな視座を導入したきわめて重要な概念と言えるのだが、筆者はこの概念がイギリスの文化・思想状況の分析道具としても有効なのではあるまいかと考えるのである。一国の文化が他国を何らかの形で支配する道具たりうるといって視座から「楽天的信念」の時代とされる一九世紀イギリスの文化・思想状況を分析することが有効であると思われるのである。かかる分析によってあの「楽天的信念」の裏に潜む別の信念、世界的関連の中でのその意味が明らかになるのではないかと考えるのである。当然ながらホートンの研究には、かかる問題関心に応えるものがないのである。

(1) 房、一九八三年、四五〇頁)。なお、「楽天的な信念」この訳は訳者の意訳であって原文に例えはoptimistic等の単語が用いられてゐるわけではない。

(2) Cf. David Nicholls, *Nineteenth Century Britain, 1815-1914*, Dawson, 1978, p. 85.

(3) Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*, Yale U. P., 1957.

(4) この種の研究として、あつたはJ. B. Bury, *The Idea of Progress* (Greenwood press, reprint 1982) 等があげられるが、本研究は少なくともヴィクトリア時代の「楽天的信念」の分析としては、ホートンの研究に遠く及ばないのである。

(5) W. E. Houghton, *op. cit.*, pp. 27-53.

(6) R. Graham, "Robinson and Gallagher in Latin America: The Meaning of Informal Imperialism", in W. M. Roger Lousi, ed., *Imperialism*, 1976, pp. 217-221. P. J. Cain, *Economic Foundations of British Overseas Expansion 1815-1914*, Macmillan, 1980.

(7) R. Graham, *op. cit.*, p. 220.

(8) 拙稿「『文化帝国主義』論」、『東亜大学研究論叢』第七巻二号、一九八三年。

一 「自由貿易主義的世界観」

註(一) G. M. Trevelyan, *English Social History*, Longman, 1944, p. 548. (松浦高嶺・今井宏訳『イギリス社会史 2』みすず書

一九世紀のイギリスと言えば、産業革命の大変動を経験し

た社会としてのイメージが強いが、同時代の人々も自らの時代が大きく変動していることをよく知っていた。ヴィクトリア朝の人々は、「変化の時代」、「人間の全生活に大きくかつ恒久的に作用する諸変化が人類史上空前の速さと広さで起こりつつある時代」に生きていることをはつきりと意識していたのである。かかる認識において彼らはほぼ一致していたが、その変化をどう捉えるかでは彼らの見解は分かれた。それを大別すれば、当該期の変化を前進ないしは進歩と捉える楽観的立場と、その変化をむしろ不安をもって見つめる悲観論的立場とに分かれたのである。

さて、本稿が分析の対象とするのは、勿論当該期の変化をきわめて楽観的に捉える立場の方である。先に述べたように、「楽天的な信念」を分析するのが本稿の課題なのであるが、かかる信念のヴォルテージが最も高まったのは、かの第一回万博たるロンドン大博覧会においてである。この大博覧会について語ることが当時の時代的ムードを最もよく伝えるであろうと思われる。そこで以下において大博覧会の概略とその同時代人による評価を見ていこう。

大博覧会開催の中心人物はなんとと言ってもヴィクトリア女王の夫君アルバート公である。そこでまず彼の大博覧会開催の意図を見ておこう。彼はその意図を博覧会開催の前年、一八五〇年に次のように述べた。

「我々の時代の特徴に注意を向けるならば、我々が大変すばらしい変化の時代に生きていることを誰も疑いえないであらう。我々の時代の特徴に注意を向けるならば、我々が大変すばらしい変化の時代に生きていることを誰も疑いえないであらう。我々の時代の特徴に注意を向けるならば、我々が大変すばらしい変化の時代に生きていることを誰も疑いえないであらう。我々の時代の特徴に注意を向けるならば、我々が大変すばらしい変化の時代に生きていることを誰も疑いえないであらう。」

本稿にとっては、この博覧会に対する同時代人の評価が問題なのであるが、やはり博覧会そのものについても少し述べておかねばなるまい。アルバート公のオープニングスピーチによれば、大博覧会の展示者は約一五〇〇人を数え（その半数はイギリス人）、その展示品は四〇ヶ国以上の国々から集められた。展示品は、一、原料、二、機械、三、工業製品、四、工芸品に大別され、いわゆるクリスタル・パレスに展示されたのである。博覧会の評判はまず上々であつて、ストレイチイの表現を借りるならば、「万人が熱狂した」のである。結局、同博覧会は、十月の閉幕時までに労働者階級を含めて約六〇〇万人もの見物人を集め大成功を収めたのである。従って、その限りで同時代人の博覧会に対する評価はすこぶる高いものであったと言えるのだが、問題はその賞賛の身である。

博覧会がオープンしたのは五月一日だが、すでにその前か

りましょう。その変化は、すべての歴史が目ざす大目的、すなわち人類の統一の実現を完成する方向に急速に向かっているのではありません。……各国、各地域を隔ててきた距離は近代の発明により急速に縮小しつつあります。我々は世界各地を信じられないほどの容易さをもって旅行できるのであります。あらゆる国々の言語が知られており、誰でもがそれらの言語をマスターしうる可能性があります。思想は急速に、しかも光の力によって伝えられるのであります。他方、文明の原動力とでも言うべき分業という偉大なる原理が科学、産業、技芸等あらゆる分野に拡大されているのです。……紳士諸君！一八五一年の博覧会は、全人類がこの偉大な仕事においてなし遂げた発展の生きた描写と真の試金石を与え、かつ、すべての国々が更なる歩みをなしうる新しい出発点をも与えるのであります」と。

このスピーチの中に、彼の意図が簡潔に表明されている。すなわち、彼にとつて来るべき博覧会は、一方では「人類の統一」への各国民の確かな結合を、他方では「分業」により達成された「文明」の成果を示すものとなるはずであった。

事態はほぼ彼の意図に沿って展開した。博覧会の開催までには多少の紆余曲折があったものの、一八五一年五月一日にはオープンにこぎ着けた。ヴィクトリア女王の伝記作家ストレイチイは、「その日、会するもの数を知らず、華麗燦然人の眼を眩惑し、熱狂の渦これを讚える情景が展開された」とオープンの日状況を記しているが、かかる記述はそれほど

ら賞賛は始まっていた。一月四日付の『エコノミスト紙』は、「すでに達成された進歩は未来の希望の最上の正当化である」と主張し、その「進歩」の例として精神的なものではナポレオン戦争後の平和、奴隷制の廃止に貢献した人道主義、寛容的宗教政策を、物質的なものとして、蒸汽機関の交通手段への適用、電信の発明、機械の広範な適用等を挙げた上で、「大博覧会はこのすばらしい半世紀の終幕にふさわしいものであると同時に、……新たな半世紀の出発点としてもふさわしいものである」とすでに断言していたのである。そして、同紙によれば、「無限の進歩」が「人類の運命」なのであった。

次に、同博覧会開催後の評価を見てみよう。ウィッグ系の『エディンバラ評論』の評者は、同博覧会の目的は「人間の知性のあらゆる成功した征服を記した人間の進歩に関する生きた巻物を入力すること」にあるとし、その成果は「もし判断の材料としたすべての資料が偽りのものでないならば、すべての諸階級が各自の知識のストックを増し、各自の楽しみみの範囲を拡大し、各自新しい啓蒙的利害関係を開拓し、それぞれ国家的歓待を享受し、各自の忠誠心を確かめた」ことにあるとした。J・S・ミルらの影響を強く受けていた『ウェストミンスター評論』の評者は、同博覧会を「未開から世界を解放した人類の普遍的進歩に関する世界的集会」と捉え、ひとわたり展示品に論評を加えた後に次のように言う。「博覧会がオープンする前には、工業技術におけるイギリスの命

脈は限られている、と予想する者もいた。我々はおかざる主張をくり返し検討してきたが、その結果どの部門においてもイギリスは劣位にないばかりか、多くの部門で抜きん出て優れていると今確信をもって言える」と。

このように博覧会への賛辞は続いたのであるが、ここでもう少しクールな観察者に登場願おう。この点では、「クリスタル・パレスの中のヴォルテール」と題されたトリー系の「ブラックウッド・マガジン」の同博覧会評はなかなか興味深い。「新しい社会の時代、人類の未曾有の前進に関するうわさ」を聞き付けたヴォルテールがロンドンにやって来、博覧会を見学し、最後に「百年前のパリに生きていた」ことに満足してパリに帰るといのが同論文の筋書であり、従って明らかに博覧会にはいささか批判的なのである。ヴォルテールは博覧会の見学中に何人かの人々と会話を交わす。その一人は「機械学の教授」であり、いま一人は「青ざめた表情のメランコリーないギリス人」である。「教授」は、ヴォルテールに鉄道を次のように説明する。「これが我々の鉄の奴隷です。彼に石炭を与えますと驚のようなスピードで町から町へ、国から国へと我々を運ぶのです。このようなエンジンのことを考えますと、人類の進歩に制限があるなどとは申せないのです」と。彼は「この時代が他の時代などとは比較できないほどになし遂げた巨大な進歩」をまるで無批判に賞賛する人物であつて、この人物は同論文の著者がすでに紹介した「エコノミスト」、「エディンバラ評論」らの主張に見

大博覧会のようなブルジョア的、新奇な催しは概して認めようとはしなかつたのであるが、にもかかわらず「メランコリーないギリス人」の立場を「野蠻」への回帰に他ならないとして斥けざるを得なかつた点が肝要である。というのは、そこに当該期の「文明」、「進歩」への楽観的信仰の強さを看取しうるからである。

かくて、一八五一年の大博覧会は、一九世紀半ばまでに達成された物質的進歩、そして当該期にあつては物質的進歩は精神的進歩と直結するとの観念が一般的であつたが故に、精神的進歩、あるいは「文明」を誇示すると同時に、その後「進歩」を保証する一大モニュメントとして位置づけられたのである。ヴィクトリア朝期の人々は自らの達成した「進歩」、「文明」に半ば手放して酔つたのである。「女王がハイド・パークでの博覧会を開幕した。新聞によつてはかばかしいほどに重要性を増加せしめられたグラランド・ショー」と大博覧会の開幕当日に冷やかに日記に記したスタンレー（五代ダービー伯）でさえ、その四年後にこの日記に次のようなコメントを付記していた。「無制限の通商の時代が始まり、戦争の時代は終焉した。従つて、各国の全般的武装解除が始まるにちがいないというのが当時の自由党—自由貿易派 Liberal free-trading party の常套句であつた。かかる立場を極端にまで押し進める者はおそらくほとんどいなくなつたであろうが、きわめて冷静な人々の中においてさえ多くの者がこのような支配的妄想に多少なりとも影響されていた」と。

られた当該期に支配的な「進歩」への楽観的信仰を揶揄するために登場させた人物であると言える。他方、「メランコリーないギリス人」は、「私どもは全く誤つたコースを採つてしまつたのです。私どもは自らを奴隷化し、重労働と奴隷制という社会的墮落に縛りつける機械を製作しているのです。私どもは単純な世界に帰らねばなりません。各自の欲望を抑制し、偽りの必要を捨てねばなりません。……私どもの仕事はより多くの機械を製作することではなく、すでに発明されたものの中から本当に残す価値のあるものを選ぶことなのです」と主張する反「機械の時代」、反「進歩」の代表的人物なのである。そして、ヴォルテールの立場はこの両者の中間的なところに置かれている。彼は「教授」の「進歩」への無批判な賞賛に対してはロンドンにおけるスラム街の存在を指摘するなどして「進歩についての大騒ぎ」を冷笑し、他方で「メランコリーないギリス人」の主張は「野蠻」に帰ることではないとして斥け、むしろ「できるだけ多くの文明を手に入れなければならない。できるだけ文明を享受しましょう」と説くのである。そこで、ヴォルテールの立場は、両者の中間とはいつても、「教授」が指摘するように「文明に貢献する技芸や発明を正当に評価」しているのであり、確かに当時の無批判な博覧会への賞賛の輪に加わつてはいないものの、基本的には当該期の「文明」、「進歩」を認めたものと言えるのである。

『ブラックウッド・マガジン』はトリー系の雑誌であり、

大博覧会はただ「進歩」を誇示するのみならず、とくにアルバート公の影響で世界平和への幻想をもふりまいていたのだが、スタンレーは後者との関連で当時の状況を回顧したわけである。ともかく、大博覧会は、スタンレーも認めるように、一八五一年における「熱狂の対象」だつたのである。

このように、一八五一年の大博覧会はヴィクトリア朝期の「進歩」、とりわけ物質的進歩への楽観的信仰の強さを端的に証明するものと言えるのだが、当該期における信仰の対象は、実はこれだけではなかつた。その物質的進歩を当該期の世界的状況の中で最もよく実現せしめる政策として認識されてきた自由貿易政策と同様に信仰の対象であつた。大博覧会に体现された物質的進歩と自由貿易政策との関係の認識については、先に引用した「ウェストミンスター評論」の論文の次の一節に明白である。

「偉大な成果に対してすべての階級の人々により驚きと喜びとが表明されてはいるが、こうして集められた多くの富が税関の黙認によつてのみ見ることが可能になつたのだという事実を忘れてはならない。我々はおお自由貿易を手に入れてはいないのである。一時的に關稅の障壁を除去することでは掃することを得られる成果は計り知れないものとなるであろう。我々としてはこの問題を解決するためにサー・ロバート・ピールが生き返ることを願うしかない」。

一八四六年には穀物法が、四九年には航海法がそれぞれ撤

廃されており、すでに自由貿易政策はほぼ確立していたと言えるのであって、一八五一年における「自由貿易を手に入れない」との表現は、保護貿易派 Protectionist party の残存という政治的事情はあるにせよ、オーバーなものであるが、こうした表現そのものがすでに当該期の自由貿易政策への信仰の強さを示しているといえよう。

さて、この時代にあつては「変化の時代」であるとの認識が一般的であり、その変化を「進歩」と捉える楽観的立場と、むしろそれを不安をもって見る悲観的立場とがあったことは先に述べた通りであるが、自由貿易政策を押し進める人々は勿論前者の立場を採った。この点に関しては自由貿易政策の画期とされる一八四六年の穀物法撤廃を断行した首相 R・ピールの次のスピーチの一節は興味深い。彼は下院議員達を前にして、「今夜は議員諸氏がイングランドの通商政策をざし示すことになるモットーを選択することになっております。『前進』か、はたまた『後退』か、いずれかを選択せねばなりません。どちらがこの大帝国にふさわしいモットーでありましょうか」と、「前進」＝穀物法撤廃——自由貿易政策か、「後退」＝穀物法維持——保護貿易政策かの二者択一を迫ったのである。

自由貿易政策と言えば、勿論 R・コブデンの名を忘れるわけにはいかないが、彼を中心とする当該期の自由貿易思想は以下の特徴を有していた。第一に、自由貿易論としては、自由貿易政策の遂行が「世界平和」の実現に貢献するとか、その表明である。「今日は聖誕降誕祭の最終日である。マンチエスターの人々はそれをこれまでになく楽しんで居る。これほどの全体的な幸福感の証拠を私は見たことがない。我々はまぢがいなく至上の幸福と繁栄の中にある。自由貿易、平和そして自由。おお幸福なイングリランドよ」⁽¹⁵⁾ かかる喜びの表現も明らかに「自由貿易主義的世界観」の持主のものである。

(1) “The Progress and Spirit of Physical Science”, *The Edinburgh Review*, July, No. CCXIX, 1858 p. 71.

(2) J. B. Bury, *The Idea of Progress*, Greenwood press, 1982, p. 330.

(3) リットン・ストーンチイ、小川和夫訳 『マンチエスター王』、富山房百科文庫、一九八一年、一五九頁。

(4) *The Diaries of John Bright*, Kraus reprint, 1971, p. 123.

(5) Christopher Harvi, Graham Martin & Aaron Scharf, *Industrialisation and Culture, 1830—1914*, Macmillan, 1970, pp. 234—237.

(6) リットン・ストーンチイ、前掲訳書、一六一頁。

(7) *The Economist*, 4 Jan., 1851.

(8) “Official Catalogue of the Great Exhibition”, *The Edinburgh Review*, No. CXII, 1851, pp. 562, 598.

(9) “Industrial Exhibition”, *The Westminster Review*, Vol. LV, No. II, 1851, pp. 349, 391.

(10) “Voltaire in the Crystal Palace”, *Blackwood's Edinburgh*

べての諸階級の利益を現実化するものであるとか、概して調和論的側面が強調されたこと、第二に、しかし、当該期の自由貿易論者はこの自由貿易政策が現実的にはイギリスの産業的優位を維持・拡大するための政策であることを強く意識していたこと、以上である。本稿にとり重要なことは、かかる自由貿易思想・政策が一八四六年の穀物法撤廃後、「ブリテンの生まれながらの経済政策」、ないしは「国民的ドグマ」と化したことである。⁽¹⁶⁾ 『タイムズ紙』の表現を借りるならば、自由貿易政策は「代議制」などと同じく「国民的信念の一ケ条」と化したのである。⁽¹⁷⁾ 一九世紀後半のイギリスの繁栄と自由貿易政策とが全く無批判に結びつけられることになったのである。イギリスの世界的繁栄にとり自由貿易は不可欠であるとの強い信仰が生まれたのである。⁽¹⁸⁾

筆者は、以上見てきたヴィクトリア朝期における物質的進歩、ならびに自由貿易へのきわめて楽観的な信仰を中心として形成された当該期に支配的な文化的思想的特徴を「自由貿易主義的世界観」として捉えたいのである。鉄道、機械等がもたらす物質的進歩、そしてその進歩を政策的に保障する自由貿易、これらがこの世をパラダイスならしめるのだという世界観、これを「自由貿易主義的世界観」と捉えたいのである。「市民的宗教的自由は言うに及ばず、選挙法改正、蒸汽船、鉄道、ペニー郵便制度そして自由貿易が現実のものになった時代にあなたが生きていることを喜ぶべきです」というコブデンの書簡は明らかにこの「自由貿易主義的世界観」

Magazine, Vol. LXX, 1851, pp. 142—153.

(11) Cf. W. E. Houghton, *op. cit.*, p. 41.

(12) J. R. Vincent (ed.), *Disraeli, Derby and the Conservative Party: The Political Journals of Lord Stanley 1849—69*, Harvester press, 1978, p. 63.

(13) *Ibid.*

(14) *The Westminster Review*, 1851, Vol. LV, pp. 393—94.

(15) この問題については本稿を参照。Robert Stewart, *The Politics of Protection: Lord Derby and the Protectionist Party 1841—1852*, Cambridge U. P. 1971; Travis L. Crosby, *English Farmers and the Politics of Protection 1815—52*, Harvester press, 1977.

(16) *The Debate upon the Corn Laws*, in session 1846, printed, by permission, from “*Hansard's Parliamentary Debates*”, Vol. 1, p. 345. (16 Feb., 1846).

(17) 前掲の自由貿易論とこの書は、拙稿「イギリス自由貿易思想の展開」一八二〇——一八四六年」(『経済研究』一五〇号、一九八一年)を参照。

(18) N. McCord, *Free Trade: Theory and Practice From Adam Smith to Keynes*, Ovid & Charles, 1970, p. 11.

(19) Eric J. Evans, *The Forging of the Modern State: Early Industrial Britain, 1783—1890*, Longman, 1983, p. 277.

(20) 自由貿易政策が一八世紀後半のイギリスの繁栄への要素としての関係を考察している R. A. Church, *The Great Victorian Boom 1850—1873*, Macmillan, 1975.

(21) 初期マルクスの思想に内在した「自由貿易主義的世界観」の研究として、山之内靖「マルクス・エンゲルスの世界史像」（未來社、一九六九年）がある。

(22) Cobden to Wilson, 4, March, 1846 quoted in Ronald Read, *Cobden and Bright, The Origins of Modern English Society* 1780-1880, Routledge & Kegan Paul, 1969, p. 408.

(23) Harold Perkin, *The Origins of Modern English Society* 1780-1880, Routledge & Kegan Paul, 1969, p. 408.

二 「文明化」論

「自由貿易主義的世界観」は以上見たようにまずはきわめて楽観的な世界観であると言える。ところが、世界史的関連の中でその意味するところを考察するならば、イギリス以外の国にとっては、それは必ずしも楽観的に享受しうるものではない。このことは「自由貿易主義的世界観」と当該期の「文明化」論との関連を検討することで明らかにする。まず、「文明化」論について見てみよう。一九世紀中葉のイギリスの対外進出の主役の一人パーマストンの次の言葉はその基本的発想をよく示している。「私は一切誇張なしに我々が道德的、社会的、政治的文明の頂点に位置していると断言できます。我々の仕事は他の諸国民を先導することなのであります」¹⁾。当該期の西欧世界における「文明化」論では、世界は西欧世界Ⅱ「文明」、非西欧世界Ⅱ「野蛮」ないしは「未開」とに大別され、「文明」世界たる西欧が「野蛮」な非西欧世界を

せるに相違ない、従って当然他者は自己の業績を受容するはずであるとの仮定までも内包する世界観だったのである。次のコブデンのスピーチはこのことをよく示している。

「我々はいつの時代にも世界に手本を示してきたのであります。我々は世界に代議制度を与えました。本院のルールは文明化された世界に存在するすべての代議制議會のモデルとなってきたのであります。更に、自由な新聞、市民的・宗教的自由、そして自由と文明に属すあらゆる制度を与えてきたのであります。我々は今やより偉大な手本を与えようとしているのであります。すなわち、産業を自由にするという手本を示そうとしていたのであります」²⁾。

そして、更にこの世界観には世界の「文明化」を当然視し、しかも自らの達成した業績が世界変革Ⅱ「文明化」を結果しうる力を有するとの確信さえ内包していたのである。同じくコブデンの言葉を引用しよう。

「今日において、商業は万能薬であり、有益な医学上の発明と同じように、世界中の国々に文明を希求する健全で必ず役に立つ志向を植えつけることに貢献する。我国から輸出される商品はどれも必ず開化の遅れた国の人々に知性と実り豊かな思想の種子を運び、我国の工業地帯を訪れる商人は誰もが自由、平和、良き統治の宣教師として自国に帰るからである。他方、ヨーロッパの各港を訪れている我国の蒸気船と各国で話題になっている我々の奇蹟とでも呼ぶべき鉄道とは、我国の開明的な諸制度の価値を宣伝し、かつ確証せしめ

「文明化」する使命を負っているとされたのだが、このパーマストンの表現に見られるように、イギリスにおいては「文明」世界たる西欧の中でも特にイギリスが最高の「文明」国であることが強調され、従って、非西欧世界に対する「文明化」の仕事も、とりわけイギリスに課せられた義務であることが強調されたのである。かかる「文明化」論の最大の特徴は、そこで唱えられた非西欧世界の「文明化」が単なるスローガンではなかったことにある。当該期の「文明化」論者は、実際に非西欧世界を「文明化」することが可能と考え、かつ実際に実践活動もしたのである。インドにおける活動はその最も顕著な具体例である³⁾。

ここに極く簡単に紹介した「文明化」論の抬頭については、福音主義、功利主義との関連で説明した研究がすでにあるが、それはより広くヴィクトリア朝期の代表的世界観たる「自由貿易主義的世界観」からも説明されねばならない。「自由貿易主義的世界観」も、「文明化」論の発想の一つの母胎であったからである。F・ハリソンは「一九世紀ほどに自らのすばらしい業績、自らの富と力、生活を快適に享受する自らの才能を賞賛した世紀はなかった」⁴⁾、と一九世紀を評したが、実際その通りであった。「自由貿易主義的世界観」は、先に引用したコブデンの書簡にも見られたように、自らの達成した業績への過度な自己満足の表明であったとも言えるのである。しかも、驚くべきことには、それは自己満足の表明に止まらず、自己が満足しえたものは必ずや他者をも満足さ

ているのである⁵⁾。

このように、「自由貿易主義的世界観」は、自らの達成した業績Ⅱ「文明」に対する自己満足感を表明するだけでなく、自由貿易、近代の生産・交通手段を「進歩」の原動力とする世界変革を当然と看做す世界感でもあったのであり、そこで、そこから自己の達成した「文明」の高みから見て「野蛮」としか評価しえない非西欧世界を自由貿易、近代の生産・交通手段により変革させる、つまり「文明化」させるといふ議論も出て来るのである。つまるところ、当該期の「文明化」論は「自由貿易主義的世界観」の一つの表明に他ならなかったわけである。そこで、かかる世界観は、少なくとも「文明化」の対象とされた側からは、はなはだ厳しい世界観に見えてくるのである。この点を最も鮮明に明らかにしうるのが、「文明化」——「文化帝国主義」の概念なのである。これは、インドを例として「文化帝国主義」の一類型として筆者が提唱したもので、「野蛮」とイギリスの側から一方的に断定した植民地インドに対して「文明化」を試み、そのプロセスを通じてそこに文化的従属状況を生ぜしめ、最終的には非公式な帝国主義支配を行うという構想・実践を捉えた概念であるが、かかる視角から考察する時、「文明化」のプロセスが、先進国の側の「善意」にもかかわらず、「文明化」対象国における文化従属状況を生ぜしめるプロセスに他ならないことが明白になるのである。すなわち、「文明化」——「文化帝国主義」なる概念は、非西欧世界が「文明化」によって「文明」を得

る代償として固有の文化を破壊され、失ってしまいかねないのだという事実を鋭く剔抉するのである。

しかし、「文明化」——「文化帝国主義」と「自由貿易主義的世界観」との間にはある種のギャップが存在する。「自由貿易主義的世界観」の「文明化」の場合、「文明化」の具体的手段は、自由貿易、近代的生産・交通手段等であって、その対象地域が植民地、ないしは半植民地である必要はないのに対し、「文明化」——「文化帝国主義」の場合には、「文明化」の対象地域に対して、法制度の改革、キリスト教の普及、教育制度の導入等を手段として「文明」を移植するのであり、その対象地域が植民地、半植民地であることを前提としているからである。かかる両者の差異は「文明化」対象地域の「文明化」能力の評価の相違に拠るものである。後者の場合、先進国への「服従」こそが「文明化の第一課」であるという認識、「野蛮」な世界は先進国の支配下でしか「文明化」しないという認識が基本的前提として存在するが、前者の場合、ただ自由貿易、近代的生産・交通手段がそれ自体の力で非西欧世界の「文明化」を遂行するものと観念されており、「文明化」の具体的様態、成否を決定するのは非西欧世界の主体的努力に西欧化への努力なのである。先に引用したコブデンの「通商は万能薬である……」という表現、あるいは、「通商は、右手に文明、左手に平和を伴いつつ人類をより幸福に、より賢明に、より良くするために力強く前進する」⁽⁶⁾というパーマストンの表現、これらが、「自由貿易主義的世界観」

の「文明化」の具体的プランを示す最も一般的なものである。

このように、確かに、「文明化」——「文化帝国主義」と「自由貿易主義的世界観」の「文明化」論とは差異がある。しかし、前者が明らかにした非西欧世界での「文明化」のプロセスが実際のところ文化的従属のプロセスに他ならないという事実が、後者に妥当しないとは言えない。何故なら、後者の場合でも、非西欧世界の独自の文明を認めるといふ態度は存在せず、非西欧世界は西欧の「文明」を当然受容すべきである、あるいは非西欧世界の西欧的「文明化」は当然であると考えているのであって、かかる「文明化」が、たとえ帝国主義支配とは直結しないとしても、非西欧世界に文化的従属状況を生ぜしめる危険性を孕むものであることは明白だからである。ただ、この場合には、先進国から非西欧世界が「文明化」を物理的に強要される恐れはないのであり、西欧的「文明化」による文化的従属は、むしろ非西欧世界の近代化への対応の仕方如何にかかっていたのである⁽⁶⁾。

以上、「自由貿易主義的世界観」を、「文明化」論、「文明化」——「文化帝国主義」の視角から見れば、西欧世界の立場からはいかにも楽天的、楽観的なものと見えるこの世界観が、非西欧世界に対しては悲劇の結果をもたらしかねない強力な毒を含むものであったことが明白になるのである。

註(一) R. Hyam, *Britain's Imperial Century, 1815-1914*, B. T.

Batsford, 1976, p. 49.

- (2) 拙稿「文化帝国主義」論参照。
- (3) 松井透「イギリスのインド支配の論理」、『思想』四八九号、一九六五年。
- (4) W. E. Houghton, *op. cit.*, p. 39.
- (5) *Speeches on Questions of Public Policy by Richard Cobden*, M. P., Kraus reprint, 1970, p. 198 (House of Commons, 27 Feb., 1846).
- (6) "England, Ireland, and America", *The Political Writings of Richard Cobden*, Kraus reprint, 1969, p. 36.
- (7) 拙稿「文化帝国主義」論参照。
- (8) "Considerations on Representative Government" *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. XIX, Routledge & Kegan Paul, 1977, p. 415. (水田洋・田中浩訳『代議制統治論』世界の思想二一六、河出書房、一九六七年、二二三頁)。ミルの『代議制統治論』は、この時代の「文明化」論の一つのサンプルとしても重要である。なお、筆者はその見解を必ずしも支持しないが、ミルを帝国主義の擁護者として積極的に評価しようとする研究もある。Eileen P. Sullivan, "Liberalism and Imperialism: J. S. Mill's Defence of the British Empire", *Journal of the History of Ideas*, oct, 1983.
- (9) *Hansard's Parliamentary Debates*, 3rd Series, LX, 619. (16 Feb., 1842).
- (10) 筆者は、この問題を、やはり「文化帝国主義」の一類型としての「後進世界の近代化」——「文化帝国主義」という概念で捉え考察したことがあるが（前掲拙稿「文化帝国主義」

論参照)、後進世界が物理的強制力不在の中でもなおかつ西欧的「文明化」を選択せざるを得なかったメカニズム等を含めて、再度論じてみたいと考えている。

三、二つの「文明化」論と「自由貿易主義的世界観」

前章で「自由貿易主義的世界観」と「文明化」論との関連を見たが、「文明化」論と言えば、一九世紀末、本来的帝国主義の時代にも「文明化」論は盛んであった。果たして両者は同じものだったのか。結論的に言えばその内実は相当に異なるものだったのである。と云うのも、「自由貿易主義的世界観」の「文明化」論、「文明化」——「文化帝国主義」を支持していた諸前提が、一九世紀の後半、ほぼ一八六〇年代頃から揺らぎ始めるからである。では、その諸前提とは何か。第一に、西欧文明の優秀性と普遍性への強い確信である。第二に、西欧側から「未開」「野蛮」と看做した非西欧世界も、西欧の「文明化」の働きかけがあれば必ず西欧の文明世界になりうるという確信である。

まず、第一の前提から検討しよう。西欧近代史全体の文脈で論じるならば、西欧文明の普遍性への確信が西欧世界で崩壊し始めるのは第一次大戦後と言わなくてはならないが、少なくともイギリスにおいては一八六〇年代頃より、非西欧世界、とくに植民地と接触していた人々を中心として西欧文明の普遍性への懐疑が強くなっていくのである。例えば、D・A・

ローは、インド、アフリカにおいて一八六〇年代にその統治思想が変化し、イギリスのイメージでインド、アフリカを再生しようという思想がこれらの地域で大きく後退してしまったと指摘している。⁶⁰しかし、この点については、R・オールコックの『大君の都』に見られる思想がきわめて興味深いのである。『大君の都』は、彼が一八五九年六月に駐日総領事兼外交代表として来日してから約三年間の滞在記録である。同書には傾聴すべき指摘が多々あるのだが、本稿の立場から注目されるのは、彼が先に述べた六〇年代における二つの立場、西欧文明の普遍性への確信とそれへの懐疑の間を揺れ動いていたことである。しかも、西欧文明の普遍性への懐疑をより強めつつ揺れ動いていたのである。確かに、彼も、当該期のヴィクトリア朝期の人々と同じく、ヨーロッパ「文明」、アジア「野蛮」ないしは、「未開」と看做し、「日本人も中国人もかつては師たりえたものの、ヨーロッパの若い子孫に競争でずつと追い抜かれてしまったいまでは、生徒たるの地位を甘受し、坐して学ぶことに甘んじなければならぬ」と言っている。⁶¹ところが、他方で、彼は次のようにも主張するのである。

「西洋諸国が真の宗教の恵みや福音書の知識や高度な文明のいっさいの利点を、比較的野蛮な状態にあるとわれわれが見なしている東洋の諸民族に広めるといふ責務について、多くのことがいわれ書かれている。しかし、もしそういったはったりめいたことばや大衆向きの長舌の本当の意味を知ら

ずかす動きが強く出て来た。それは人種論の抬頭である。次のC・キングズレーのJ・S・ミル批判はかかる動向を見事に伝えている。「私の理解するところでは、彼（ミル）は人種上の差異と優越のドクトリンを公然と否認しております」。ミルは人種間に不平等が存在するとしても、それは環境のせいであると考える。「過去においては、私もかかるドクトリンを支持していた」けれども、今や私の経験は「環境を抛り所とするすべての教育を拒む生来の差異と遺伝的諸傾向とが存在する」ことを私に教えるのである。また、「人間の差異はあまりにも大きいので、人種によっては、例えばアイルランド系ケルト人などは全く自治には向かない」のである。⁶²

かかる人種論の抬頭は、植民地支配の現場でも見られた。例えば、インドにおいては一八五七年の大反乱を一つの契機としてインドの統治は、かつてマコーレーらが構想したような、支配者IIイギリス人と被支配者IIインド人との間で「仲介者」として働くインド人とイギリス人との「協同の努力」としてではなく、「人種的征服の精神」によって行われることとなるのである。⁶³

うとするなら、われわれは哲学的な真理を愛好する気持ちになつて、ヨーロッパの文明とアジアの文明がどういふ点で一致し、どういふ点で異なるかを、検討してみなければならぬ。そして、両文明が、善悪いずれにせよ、とにかく生みだしたものにかんしては、われわれの自尊心があまり認めたらならいほど互いに類似していること、しかもただ形態上の差異が内容と原則上の根本的な差異だと誤って考えられてきたことがわかるなら、ヨーロッパからもつてきたあらゆる種類の万能薬を、粗雑な宣伝手段によってアジア人に押しつけたという熱意は、おそらく多少弱まるかもしれない。われわれの方では、東洋の専制主義や制度につきまといっている害悪をおすつもりでその万能薬を押しつけようとするのだが、東洋の制度は東洋人や東洋諸国に固有のものであって、長いあいだの発達と相互の順応によって同化されているという大きな利点をもっていることを忘れてはならない。⁶⁴

「忘れてはならないことがある。それは、進歩とか文明とかいふことばでわれわれが理解している結果は、西ヨーロッパ以外では望まれてもいないし、理解されてもいないといわれているが、これは正しいことだ」。⁶⁵

ここには明らかに西欧文明の普遍性への強い懐疑が存在する。こうして、とくにイギリスの対外進出に関わった人々を中心として六〇年代頃より西欧文明の普遍性への懐疑が生じたことが認められるのである。

第二の前提についても、やはり六〇年代頃からその存立を

六〇年代は上述の如き楽観的「文明化」論と苛酷な人種論とが競合した時代であったと言えるかもしれない。例えば、一八六六年に、W・H・フロワー教授は次のように述べている。「すべての人間は道徳的、知的に平等であるというイギリスの人氣のある理論とすべての人間はすべての点でイギリス人に劣っているという日常的なイギリス人の実践との間の大きな矛盾。両命題は全く誤りなのである」⁶⁶と。

さて、こうして早くも一八六〇年代には以上二つの前提が懐疑の対象になっていたのであり、従つて一九世紀末の「文明化」は、その実質をほとんど失った単なる帝国主義支配の正当化のイデオロギーでしかありえなかったのである。「文明化」しえない国、地域が存在することを認め、かつそもそもイギリスの側での「文明化」の意欲と自信を喪失した後の段階での「文明化」論が、実際に「文明化」を可能と信じ、かつ実行せんと試みた時代の「文明化」論と同じものでありうるはずはない。両者は似て非なるものであったと言ふべきであろう。

このように、「文明化」論に関して、その意味を大きく変容せしめた文化的・思想的潮流の変化が認められるのだが、「自由貿易主義的世界観」そのものについてはどうであろうか。勿論、以上の二つの前提への懐疑はストレートに「自由貿易主義的世界観」にもはね返ってくるのだが、それだけではなく、かかる世界観を支えた時代のムードそのものが変化する兆候が見え始めるのである。例えば、ヴィクトリア朝期

の代表的詩人の一人、アルフレッド・テニソンの『ロックスリー・ホール』(一八四二年)と『六〇年後のロックスリー・ホール』(一八八六年)。これら二編の詩のトーンの落差ははなはだ大きい。前者では、「前へ、前へ、友よいざ乗りだせ。偉大なる世界をして、とこしえに変転のわだちを歩ましめん、されば地球の庇護のもと、われらは若き日に立ちもどらん。ヨーロッパが五十年は、シナが千年にもまさるなり」と当該期の物質的進歩を手放しで賞賛していたのに対し、後者では、ペシニズムと幻滅のトーンが支配的となり、「前へ、前へ、という叫びが消えてしまった」と歌うに至るのである。また、M・アーノルドは、『教養と無秩序』(一八六九年)の中で、次のように同時代批判を展開している。「政治上においては、一八三二年の選挙法改正と地方自治、社会的領域においては、自由貿易と自由競争と商工業者の大身代をこしらえること、宗教的領域においては国教反対派の国教反対主義と新教の新教主義をその信念の基点としてもつ、大きな中流階級の自由主義」が「ついさきごろまでのこの国における最高の力であり、未来を支配するように思われた力であった」のだが、今や「それは第二位におとされ、それは昨日の力となり、それは将来性を失った」と彼は主張する。かかる事態は、「新しい力」||「より民主的な力」が抬頭したことによるのだが、彼によれば、この「中流階級の自由主義」はそもそも「機械に対する信仰」という「破滅の基」を内在させていたのである。彼にとっては、次のブライイトのスピーチな

どうか、また、その方向がウィーナの主張する方向へのものであったのかどうか、これらの点についてはなお検討を要するであろう。

さて、このように問題は複雑ではあるが、「自由貿易主義的世界観」を支えた時代的ムードも一九世紀の末までには相当な変容を遂げたとは言えるであろう。

かくして、「自由貿易主義的世界観」その「文明化」論は、とりわけ一九世紀中葉のイギリスの時代的特質、時代精神の一表明であったと言いつてもよい。

(註一) D. A. Low, *Lion Rampant: Essays in the Study of British Imperialism*, Frank Cass, 1973, pp. 39-72.

(註二) Sir Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, Greenwood press (reprint), 1969, Vol. I, p. 225. (山口光雄訳『大君の都』、岩波文庫、上巻一九六二年、三三六頁)。

(註三) Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon*, Vol. II, p. 263. (『大君の都』下巻、一五四—一五五頁)。

(註四) *Ibid.*, p. 356. (同訳書、二六八頁)。

(註五) C. Kingsley to Prof. Lornier (17 Dec. 1866) quoted in R. Hyam, *op. cit.*, pp. 82-83.

(註六) Eric Stokes, *The English Utilitarians and India*, Oxford U. P., 1959, p. 269.

(註七) R. Hyam, *op. cit.*, p. 81.

(註八) C. Bolt, *Victorian Attitudes to Race*, Routledge, 1970, pp.

どは「機械に対する信仰」の最たるものである。「諸君のしたことをごらんさい、わたたくしは、この国を見わたし、諸君の建設した都市、諸君の敷設した鉄道、諸君の生産した製品、世界がこれまでに見た最大の商船隊の諸船につまれた船荷を見る。……」⁽⁹⁾

これらの時代認識は、この時代の変化は必ずしも楽観的に「進歩」とは捉えられないという立場の抬頭を示唆しているが、研究史的にも、一九世紀の後半にはこのような立場が勢いを強め、楽観的な進歩思想、「機械の時代」への反発が強まる⁽¹⁰⁾と捉える研究の方が一般的なようである。例えば、M・J・ウィーナなどは、「物質的な進歩を賞賛する軌道は、一八五〇年代にすでに極点に達してしまったのである。一八五一年以後、とりわけ一八六〇年代に入ると、思想と感情の潮流は方向を変え、「産業革命の馴化」へと向かったと主張している。また、このウィーナも依拠している技術史家L・T・C・ロルトは、一九世紀の前半はオプティミズムの時代であったが、後半はむしろ幻滅と疑いの時代であったと捉え、その転機を、一八五九一六〇年にかけてのI・ブルネル、R・ステイブソン、J・ロック、この三人の偉大な技術者の相次ぐ死去に求めている⁽¹¹⁾。

確かに、一八七〇年代は、いわゆるビクトリア朝期の大ブームの終わりの時代であり、これ以後社会的ムードが変化していくのは明らかである。しかしウィーナのように「思想と感情の潮流」が方向を変えたのが六〇年代であったと言えるか

4-5.

(9) James Stephens (ed.), *Victorian and Later English Poets*, 1934, pp. 42, 198. A・ウィリアムズ、田中浩訳「帝国主義と知識人」岩波書店、一九七九年、三七頁。

(10) M・アーノルド、多田英次訳『教養と無秩序』岩波文庫、一九四六年、七九—八二頁。

(11) 勿論、一九世紀の後半も楽観的進歩思想が支配的であったとする説もある。J・B・Bury, *The Idea of Progress* はその代表的なものである。

(12) Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980*, Cambridge U. P., 1981, p. 30 (原剛訳「英国産業精神の衰退」勁草書房、一九八四年、四八頁。但し、訳文については、訳書の欠落を補い、訳語も一部改めただ)。

(13) L. T. C. Rolt, *Victorian Engineering*, Penguin books, 1970, pp. 14-15, 161-167.

結 語

一九世紀イギリスに特徴的とされたかの「楽天的信念」は、「自由貿易主義的世界観」と捉えることが最もふさわしい。またその世界観は「文明化」論、更には「文化帝国主義」論の視座から照射される時、その楽観的相貌はにわかに変容し、そこに内在する非西欧世界に悲劇的運命をもたらしかねない毒を浮かびあがらせること、これらの事実が以上の考察

により明らかになったであろう。そして、「自由貿易主義的世界観」として捉えられた「楽天的信念」は、とくに「文明化」論の視角から見る時、一九世紀を通しての特徴的信念というよりは、むしろ一九世紀の中葉を中心とする特徴的信念として理解されるのが適切であることも明らかになったであろう。

しかしながら、イギリスにおける一九世紀という時代の相貌、その文化・思想状況は複雑である。「文化史上のパラドックス」⁽¹⁾とされるヴィクトリア時代のゴシック・リバイバルなどはこのことを端的に物語っている。例えば、楽観論、悲観論の単純な二分法的理解では工業化のシンボルたる鉄道とゴシック様式の建築とが結合したセント・パンクラス駅を説明するのは明らかに困難である。本稿の試みはかかる矛盾に満ちたヴィクトリア時代の文化・思想状況の一部に光を投げたものにすぎない。にもかかわらず、以上の考察により、我々にとりポピュラーではあるが、必ずしも明確なイメージを与えられなかった一つの時代の信念についてある程度明らかにしえたと思うのである。

註(1) Igor Webb, "The Bradford Wool Exchange: Industrial Capitalism and the Popularity of Gothic", *Victorian Studies*, XX, 1976, p. 45.

(2) 両者の関連の説明については、とりあえず次を参照。C. Dellheim, *The Face of the Past*, Cambridge U. P., 1983. トン

ク・リバイバル等を一つの手懸かりとして、自由貿易——「自由貿易主義的世界観」とは別の文化・思想状況の流れを探り、両者の関連を解き明かすのが筆者の今後の研究の方向である。

本稿脱稿後、Jeffrey Paul Von Arx, *Progress and Pessimism: Religion, Politics, and History in Late Nineteenth Century Britain*, Harvard U. P., 1985. を入手した。当然参照されるべき文献であるが本稿では触れることができなかった。本書は Progress と Pessimism を相対立するものとしてではなく、むしろ相互に条件付けられた関係の中にあるものとして捉えている。筆者もかかるアプローチに賛意を表明したいと考えているが、一九世紀イギリスの二大文化・思想潮流たる Progress と Pessimism は、個々人の思想の分析よりも、より広い文化史的文脈の中での両トレンドの連関を探る方がより有効だというのが筆者の見通しである。

(本稿は昭和五九年度文部省科学研究費補助金奨励研究Aによる研究成果の一部である。ここに特記して謝意を表す。)

(東亜大学)